

〈翻訳〉

シモーヌ・ド・ボーヴォワールあるいは自由への道
Simone de Beauvoir ou les chemins de la liberté

エリザベット・バダンテール

Elisabeth BADINTER

砂庭 真澄 訳／砂庭 真澄 解題

ミッシェル・ペローとアニー・コーエン-ソラルと共に続けて行う討論へのこの短い序論を始める前に、私は主観的にものを言う権利を声高に要求する、ということを白状いたします。正直に申し上げれば、そうした態度は大学人としての見地からは不快なものではありますが、しかし、私がそうであるように、ボーヴォワールと心を共にして長年戦ってきた人間という立場からすると本当に心地よいものです。今夜、私は、人生のある時に、シモーヌ・ド・ボーヴォワールに精神の母たる存在を見出した数多くの女性たちの中の一人としてお話いたします。他の多くの方々と同様に、私は彼女の娘のままなのです。そして他の方々とは反対に、私は彼女と完全に縁を切ったことは一度もありませんでした。しかしながら、この30分の間彼女について話をいたしますのに程よい距離感を見出せますようお願いしております。

1929年、シモーヌ・ド・ボーヴォワールは20歳でした。彼女は哲学の教授資格試験で、二度目の挑戦となるサルトルについて二番という優秀な成績で合格をしました。徹底してデカルト主義者であった彼女は夢のような計画を思い描きます。つまり、書くために生きること、そして一切の束縛のない我が道を行くことを欲するのです。「空気のように自由な」彼女はサルトルと聖なる同盟を結びます、「永久に私たちはお互いによそ者になることはないだろう、永久に片方が他方に助けを求めても無駄ということはなく、そして何ものもこの同盟に勝るものはないだろう」、「私たちはお互いにすべてを言うだろう」、このような誓いを伴う同盟を。

20歳のとき、他のたくさんの人間のように、シモーヌ・ド・ボーヴォワールは自分の人生を傑作にすることに胸を膨らませました、その支柱には3つの名が刻まれるでしょう、自由、真理、そしてサルトル。彼女は自分の要求のハードルを非常に高く上げたのです、彼女はあんなにも力強く人生のあらゆる幸福を望み、そして、一つの作品の中に自分自身の痕跡を残すことを望んだのですから。傑作の代わりに、彼女は自分の人生を一つの作品にし、そしてその作品を女性の解放の避けて通ることのできない基礎にしました。彼女にとって利点だったのは、一石二鳥を得たことです。不都合だったのは、彼女の作品は私生活を物差しにしてはかられることになり、また逆もしかりだったということです。彼女の書くものは特別な独自性を発揮するものではなかったものであり、そのことは彼女自身が認めるどころでした。ゆえに私たちが評価するのは哲学者であり、作家ではありません。しかし彼女はこんなにも緊密に自分の人生と作品を編み込んだのであり、こんなにもたくさんの女性が彼女と自分自身を重ね合わせてきたのですから、ただその思想の一貫性を保証すべきであるだけでなく、彼女は自らが取った選択の数々の真摯さに対する約束を、死ノ後ニモ、守らなくてはならないのです。いまや15年も前のことになったその死以来、その人生や愛に関する新しい証拠が出版され、私たちが持っていたイメージをいささか変えることになり、また彼女の話題に暗い影を投げることにもなっているだけにいっそう激しさを

増して、総合評価についての問題が提起されています。

1990年、サルトルとの書簡が、彼女の小説、『招かれた女』*L'Invitée*や『レ・マンダラン』*Les Mandarins*よりも精密に、彼らの偶発的な愛の苦悩、サルトルがボーヴォワールに課した重圧、嫉妬の苦しみ、さらには捨てられることへの恐怖をも明らかにしました。さらには、互いの都合に合わせて一人の女を使用するというようなあの醜悪な三角関係もです。シモーヌ・ド・ボーヴォワールはのちに、自分たちがしたことは間違っていた、誇るべきものは何もなかった、と語ることになるでしょう。サルトルの言葉を借りて、それを彼自身に返すことによって、彼らこそが「卑劣漢」だと思えることもできるでしょう。

その後、1997年、ネルソン・アルグレン¹との書簡が、フェミニズムの精神的母の新たな一面を明らかにしました。夢みる乙女の話題でのぼせあがっている一人の女がそこにいました。『第二の性』²の称賛者たちは、『私たち二人』*Nous Deux*³の読者そっくりで、自分の恋人を「私のかわいい夫」と呼んだり、手紙に「あなたの愛するかえるより」と署名する、もう一人のシモーヌを発見し呆然としました。反応は直ちに返ってきました。ボーヴォワールは私たちのモデルだった自由な女などではなかった。彼女は自分の作品と隠し事で真実とは異なる自分のイメージを作ることで騙したのだ。彼女はバイセクシュアルであるということについて曖昧な態度を取っていたし、最後の頃にはホモセクシュアルであることを頑として否認さえしていた。最悪なのは、粉々になった神話的なカップルを作り上げたことであり、神話が続くためにはあらゆる侮辱に耐えていたということだ。だいたい、性の平等の司祭がどのようにしてサルトルについて二番という位置を受け入れることができたというのか。サルトル、彼は哲学者で、天才だ。ボーヴォワール、彼女は彼の作品の校正係で貞淑、偉大な男の称賛者。おそらく一夫多妻制の権利を要求し、数え切れない自分の女たちと時間と感情を分け合った男の奴隷でさえあった。言われていたのよりも瑣末なものではなかった数々の愛。結局、シモーヌ・ド・ボーヴォワールはサルトルハーレムの寵姫であるためだけに生涯戦ったのだ。それが本当に女性について私たちが願った解放のモデルなのだろうか。このシモーヌ・ド・ボーヴォワールの少々戯画的なイメージ、とはいえ真実ではないとはいえイメージ、それは私が抱いているものではありません。私は逆に、彼女が誰しもそうであるように「哀れな秘密のちょっとした蓄積」を持っていたとしても、ボーヴォワールは少女時代に自分にした約束をほとんどにおいて遵守したのであり、今日もまだ私たちが最も恩義を受けている女性としてとどまっているということをお示ししたいと思うのです。

つまり、私たちは、一つの生に、自由の哲学に恩義を負っているのです。

シモーヌ・ド・ボーヴォワールの4つの自伝的著書と2つの小説の中に私たちが発見したようなその人生は、2世代3世代にわたる女性たちにとって、女性の自由についての真の教育学を形成しました。どんな人生もモデルたることを自認することは出来ないとはいえ、それでもやはり、昔からの家父長制の規範に対して背を向け、女性たちに、妻に、母に強いられていた運命を拒否し、時代の最も有名な哲学者の一人になり、彼女が自分の読者たちに、自分たちも同じように、自分たちが閉じ込められている偏見の檻を開放しようとするところまで示したということを示したということは事実です。戦前、独身の女は「売春婦かいかず後家」、子のない女は「干からびた果実」、女の知識人は「ブルーストッキングか男まさりの女」だったということは思い出すまでもありません。社会的通念に背を向け、自然なものとしての強制を拒否し、自らの知的、性的な生を引き受けること、男だけがそうすることを許可されて

いたそういったことは、もう一方の性にとっても断固可能なことのはずでした。さらに、彼女のカリスマ性、威厳、『第二の性』のとてつもない反響といったことを考え合わせれば、シモーヌ・ド・ボーヴォワールの生がその読者たちにとってどれだけ大きな解放の力強い原動力となったのかわかります。そして、耐えてきた失望、苦しみがどれほどのものであるろうとも、彼女がサルトルとなしたカップルは、間違いにせよ、正しにせよ、私と同世代の人々にとって性の平等の一種のパラダイムを作り上げたのです。

しかし、避妊も堕胎も自由であり、結婚は他の解決の中の一つでしかもはやなく、西洋の大部分の女性たちが日々誰にも依存しないで生きていけることを証明しているこの時代に、何に基づいて、この生は次に続く世代の人々にとってまだなお見本であるというのか、とおっしゃる方もいるでしょう。確かに、西暦2000年の偏見は戦後のものではもはやなく、家父長制のイデオロギーも過去の姿を失っています。けれども、シモーヌ・ド・ボーヴォワールがあれほど告発した「女性の神秘」は、この15年の間に、巧みに、今度は自称フェミニストの女性たちのペンによって復活してきています。最近のことですが、平等性についての議論の折、利他心、平和主義、献身といった、いわゆる女性的な性格への過度の賛辞と、自身の性と母親の背信者たる、ボーヴォワールに習う女性の知識人への、要するに大昔の女丈夫への非難が再び聞かれました。男性的な女、枯れきった女知識人、そういったことは、生涯シモーヌ・ド・ボーヴォワールに付いてまわった、そして彼女が気高くも無視した侮辱の言葉でした。当時、こういった攻撃は大部分男性からのものでしたし、新たな世代の女性たちはシモーヌ・ド・ボーヴォワールと連帯感を持っていました。今日、フェミニズムの推移によって引き止めて置かれた同様の発言は、アイデンティティーを探し求めているすべての女性たちにとって、評価を上げ、安心させる一つの局面を持っています。それらの発言は、自分たちの母親が最初の享受者である戦いの中で、彼女らが疲れ果てているのを見た娘たちの世代を納得させることさえできることでしょう。

コンフォルミズム（大勢順応主義）が戻ってきています。女性たちがその主体となり、さらに恐ろしいものとなって現れうるのです、とりわけ今日20歳の女性たちにとって。それこそが、『第二の性』を読むことが今までにない必要に思われる理由です。闘争心と精神の独立のモデルを再び見出すためだけではなく、今日なお、この本の主人である人物以上に女性たちを解放へと導く哲学者を私は知らないからなのです。確かに、時代の知的装備で目の前の現実を明確に定めようと努めるあらゆる試みがそうであるように、時代遅れの作品であるこの本に向けられたあらゆる批判を私は知らないわけではありません。最もよく聞かれるのは、男性の過大評価、女性の歴史についての無知、性の差異の撤廃、女らしさの無視あるいは軽視、実際自分の環境と階級しか描かなかったサンジェルマンデプレ⁴のブルジョワ知識人といったものです。私自身も、『第二の性』における心理的な女らしさに対するボーヴォワールの無理解を強調しました。そういった心理的な女らしさの特徴は、ボーヴォワールが考えたような、女を服従させるための男による根も葉もない作り事ではないのです。しかし、一時のがれの言葉がそう信じ込ませたままでいるように、女に固有のものというわけでもありません。穏やかさ、受身、憐れみ、生の保存への配慮は、必要であるけれども、個人として生き延びるためには十分ではない、両性に本質的に与えられているものです。そして、同じように、伝統的に男らしさを決めている、野心、リスクを好むこと、世の中の支配、抵抗の精神は両性に同様に現れるのであり、生存のためには女らしさと同様に必要なものなのです。

『第二の性』は、今までに女性に向けて放たれた最も解放的なメッセージを持っていることは事実で

す。そのメッセージは単純なものであり、一言で言えば、以下のように要約されます。「自然主義の議論を警戒せよ」。あなた方が自分たちの生物学的な機能に還元され、従わされているのは、必ず神聖不可侵の本性・自然の名の下になのです。有名な言葉、「人は女に生まれえない、女になるのだ」の第一の目的は、1949年に「女性の本性・自然」ということによって理解されていたものは、本性・自然そのものよりも家父長制に基づく女性の表現に負っていたのだということを証明することでした。その本性・自然は、抑圧的な性政策に対するアリバイとして（あのわざとらしくあてがわれた性器を隠す覆いとして、と申し上げたいところですが！）機会に乗じて用いられていました。女性は子宮を持ち、子を宿すということで、残りすべてのことが続いて起こることになったのです。妻、家庭の母、主婦、そういった存在について、「修道女が尼僧院にいるように家に閉じ込められている」と18世紀に言ったのはルソーです、そして、それから2世紀を経て、「卵子のように受身である」と言うような社会生物学者がいます。

事実、シモーヌ・ド・ボーヴォワールはこの家父長制の神話と戦うために最初自らのパートナーによる実存主義を引き合いに出しました。しかし、実際には、「人は女に生まれえない、女になるのだ」という彼女の言葉が、文化主義の最も急進的な合言葉です。お決まりの文句あるいは政治的なスローガンとしてこの言葉を大いに繰り返したおかげで、そのまったくけしからぬ、見事に歓喜にあふれた側面が見失われてしまったのです。大昔からの明白な事柄、とりわけ母性本能あるいは男性に対する女性の必然的な依存に関して私たちが疑問視することができたのは、デカルトよりもニーチェに負うところの、この「ハンマーを持ってする」⁵哲学のおかげなのです。間違わないようにいたしましょう、大部分において、避妊、中絶、内縁関係が私たちの社会において合法として認められたのは、『第二の性』の影響のおかげなのです。

断固として文化の側に立ち、シモーヌ・ド・ボーヴォワールは私たちに、自然・本性をその正当な場に置き直すという大きな贈り物をしてくれました。何かデカルト的な自己制御のようなものをそこで行使するためではなく、ただ単純にもう少し自分、そして自分の運命の主人であるために。要するに、『第二の性』において認められる哲学は、否（ノン）と言う非常に大事な自分たちの権利について、女性たちを意識的にしました。女性たちがかつて一度も言ったことのなかった、少なくとも、集団としては言ったことのなかったノン。とはいえ、その本だけではあんなにも多くの女性たちを動かすには十分ではなかったと私は思います。家父長制のイデオロギーに最初の破滅への一撃をもたらしたのは、作者の生によって例証されているその本であり、作者はその本の中に自身の生の見べきものを描いたのです。

だからこそ、私たちは、シモーヌ・ド・ボーヴォワールの生に、そして、真実の要求とサルトルとの自由な、まがい物ではない、平等な関係の創造というその黎明期の約束に戻らなくてはならないのです。

真実の要求

それは最も守るのが難しいものです、とりわけ彼女のように「嘘の最も狡猾な形、それは言い落としである」⁶と書くような時には。『女ざかり』*La Force de l'âge*⁷の最初の方で、シモーヌ・ド・ボーヴォワールは「誠実に自分の人生を語る」という自らの計画の範囲と限界を定めました。そのことによって彼女は何を了解したのでしょうか。精神科医の長椅子にいるように、「すべてを語る」ことではなく、「道徳的なことへの専心」なしに話すことでした。彼女の真実の要求は、今日そのことによって了解されていることとは著しく異なっていました。今日では、真実の要求は、完全な透明性の追及と似

たものとなっています。すべてを言わなかったからには、何も言わなかった。さらにひどいのは、隠した、言わずに置いたことだ。嘘をついた、だから非難すべきだ。

ポーヴォワールの目的は、はっきりと異なっています。真実を語ること、それは偏見やたしなみを物ともしないということです。例えば、彼女は子どもに関して以下のように言います。「私は、『回想録』の中で、子どもに心引かれたことは一度もなかったと書いた。赤ん坊は私を恐怖で一杯にした、その乳によって生命を欲している赤ん坊と共にいる母親や汚れたおしめを代える女たちの姿、そういったことすべてを私は嫌悪した。私は空っぽにされたくはなかった、そんな生き物の奴隷になりたくはなかった」。真実の要求、それは時に言葉にできないことを言おうとすることです。そして、言葉にできないことは、第一に、聞くに耐えないことなのです。しかしそれこそ、ポーヴォワールがその最後の本、『別れの儀式』(1981)⁸でなそうとしたことでした。サルトルの肉体的、知的衰えを詳細に描くこのテキストは、確実に彼女の作品の中で最も波風を立たせるものです。この本の出版前すでに、批評は自分に容赦をしないだろう、清算、卑しい振舞い、恥ずべき行為と非難されるだろうということを彼女はわかっていました。実際、その老い、力を失った体、子どもに帰る精神、そしてとりわけ生涯を共にした男が問題になっているときに、そういったことを語ることで、下品で「間違っただ」ことがあるでしょうか。私自身は、シモーヌ・ド・ポーヴォワールはあんなにも愛した男との個人的な清算を果たしたとは決して思いません。私は、衰退と死という、私たちの社会の最大のタブーである主題についても含めて、彼女は最後まで自分の見たものの証人でありたかったのだと思います⁹。その作品よりもさらに、1970年に書かれた彼女のエッセーである『老い』¹⁰、『別れの儀式』へのこの序論は、読むたびに衝撃を与える、私たちがあくまで無視しようとする老いについての真の書物です。他の多くの人々とは逆に、私は、私の目には知的な勇気ある行為であるものを彼女の功績にいたします。

真実を語ること、それはまた、『決算のとき』の最終巻に彼女が書いたように、「大衆に流布する瞞着を一掃すること」でもあります。もちろん、それぞれの時代がその時代に属する瞞着を生み出しますし、戦後支配していた偏見はもう私たちの偏見ではありません。いえ、そうともいいきれないかもしれません…。先ほど申し上げましたように、アメリカのラディカルなフェミニズム、特殊なアイデンティティを求める性差別的なある種の差異主義、よく消化されていないある種の生態学的な哲学とが組み合わせられた効果のもとに、女性-母の神格化が再び現れてきているのが見られます。

古いあるいは新しい、偏見の内容を越えて、形ばかりのものに勇敢に立ち向かおうとするシモーヌ・ド・ポーヴォワールのやり方はすべての人々にとって、そしてとりわけ知識人たちにとって、今日なお必要なものとして留まります。「保守思想 *bien-pensance*」あるいは「ポリティカル・コレクトネス」とも言い換えられる支配的な思想に対するこの戦いは、うわべよりもずっと難しいものです。大衆の意見に反して、そしてとりわけ支配的な道徳的価値に反して話すことは、シモーヌ・ド・ポーヴォワールが絶えず持っていたとはいえない明晰さと勇気を前提としています。なぜなら、コンフォルミズムとの戦いは時に他のコンフォルミズム、つまり、流行によるコンフォルミズムや、非コンフォルミズムのコンフォルミズムを生み出すからです。68年以降のコンフォルミズムは、禁止することを禁じ、どんなに放縦な請願書にも署名することを望みました。そのようにして、彼女や他の多くの優れた知識人たちが、慎み深くも子どもの性の自由と呼ばれていたものための25年前の請願書に署名をしました。今日、支配的なのは、逆のコンフォルミズムです。子どもの無垢を疑問視する者に気をつけろ。小児性愛者狩りが始まり、10年前には考えられなかった、密告への呼びかけが道徳的、そして公徳的な行為とな

りました。今日勇氣はどこにあるのでしょうか。今日小児性愛・ペドフィリアという名によって呼ばれているものの仮装した容認に、彼女が他の多くの人たちと署名した時、即ち「昨日」、勇氣はどこにあったのでしょうか。

若いシモーヌの3番目の願いがまだ残っています。

それは、サルトルとの同盟あるいは神話的なカップルの構築です。

私たちは公式なイメージを知っています。つまり、二人の偉大な知識人が、自由、平等、知的であるのと同じくらいに愛の共謀の上に打ち立てられた関係を最後まで生きるという賭けをした。彼らは同じ屋根の下に生きることなく、人生を分かち合ったのであり、同じ作品を書くことなく思想を分かち合った、そして、彼らは、お互いに愛し合いながら、他のところでも愛した。ボーヴォワール―サルトルあるいはサルトル―ボーヴォワールのカップルはそのようなスタイルの中でもほとんど唯一のものです。フランス文学史においてその例に近いといえる唯一の例は、ヴォルテールとシャトレ夫人とがなしたカップルで、そこには同じ知的共謀、同じ互いへの賞賛、自分たちの必然的な愛を危機にさらすことはない偶発的な愛の数々が見出されます。実際には、私たちがそれを見たように、おそらく私たちがそう信じたいと願うものよりも、あるいは、人が私たちに信じさせたいと願うものよりも優れたものではありませんでした。どんな自由が、どんな平等が問題だったのでしょうか、一夫多妻制・一妻多夫制あるいは彼らの生き方が、彼女によって選択されたというよりはむしろサルトルによって強いられていたということを今日私たちはより易く推察する時には。さらに、彼らの思想と彼らの共同の過去の一種の否認をなしていた、ベニ・レヴィとの有名な対談を、死の直前に出版することを選択することによって、サルトルは彼らの同盟は死んだということを公式に、ボーヴォワールに対してはっきりと通達したのではなかったでしょうか¹¹。それは彼女の人生の最も大きな悲しみの一つであったことを私たちは知っています。

しかし、私たちは彼らの共通の生についてシモーヌ・ド・ボーヴォワールの証言しかもってはいないという単純な理由で、これらの問題は問題のままに残ります。サルトルは自らの証言を出版しませんでした。彼女によって、私たちは彼らのアメリカでの愛の力を、彼女のアルグレンへの、そしてサルトルのドロレス・ヴァネッティ¹²への熱情を知っています。同盟の代償は双方にとって払うのが困難なものでしたが、彼らは互いにそれを払いました。私たちは、サルトルの不満のくすぶりも、悲しみも知りませんが、しかし、自分なりにサルトルは彼らの20年来の同盟を尊重したのです、たとえ死の数週間前に彼は彼女を裏切ったように見えたとしても。

結局は、サルトル―ボーヴォワールのカップルはシモーヌの重大事だったという印象が強いのです。本来の意味でも、比喩的な意味でも、彼女の人生の心臓部、その周りに彼女は残りすべてを構築しました。それなくしては何も意味がなかったのです。彼女はほとんどそのカップルのデウス・エクス・マキナ（救いの神）のように私には思われるのです。デカルトの神が絶えず世界の保存に、言い換えれば、連続的な創造に心を配っているように、ボーヴォワールはサルトルの死まで続けられた会話によって自分たちのカップルを保存することに心を配り続けました。間違っているかもしれませんが、私はこの自分たちのカップルへの極度の気遣いを永遠への欲求と解釈します。喜びも書物もつかの間のものでしかありません。彼と同じように無神論者であった彼女には、秘密に永遠の再発見を期待することは不可能でした。だからこそ、人々の記憶の中に座標となるカップルとして生き残るという常軌を逸した賭けが

残ったのでした。他のどんなものにも類似せず、しかし、50年もの間、知的な威信、男と女の間の平等、女性の自由といった私たちの世紀の価値を体現した風変わりなカップルとして。

エロイズとアベラール¹³、あるいは他の稀なカップルのように、永遠を得るのは、互いに並んだ彼らの二つの名であるということ、ポーヴォワールはサルトルよりもおそらくよく見抜いていました。サルトルとポーヴォワールは、今日、二つの部分の合算というよりも一つの観念的な存在を形成しています。私たちの子供たちはおそらく『嘔吐』も『第二の性』も、彼女と彼のどの本ももう読むことはないかもしれませんが、しかし、彼らの名は、現在、精神性の歴史に、そして、愛の神話の歴史に刻まれています。それはおそらくサルトルの本当の計画ではありませんでした。しかし、どうかこうにか自分とのこの神話的なカップルを作り上げたカストール¹⁴のおかげで、サルトルは後世に残ることでしょう。ポーヴォワールの穏やかな復讐、それは、彼女と共に彼は永遠を得るだろう、ということなのです¹⁵。

注

- 1 ネルソン・アルグレン Nelson Algren (1909-1981) はアメリカの作家でポーヴォワールと長年にわたり恋愛関係にあった。
- 2 【原注】 *Le Deuxième Sexe*, Gallimard, coll. « Blanche », 1999 (reimpr.).
- 3 *Nous Deux*は1947年に創刊されたフランスの週刊誌で、漫画の形式で恋愛物語を掲載するのがその特徴といえる。
- 4 1940年代以降、芸術家や知識人が多く集まったパリの左岸の一界隈。実存主義者たちの中心地となる。
- 5 ニーチェ『偶像の黄昏』の副題より。フランス語では、「philosophe à coup de marteau」と訳されている。
- 6 【原注】 *Tout compte fait*, Gallimard, coll. « Blanche », 1972. (邦訳『決算の時』)
- 7 【原注】 *La Force de l'âge*, Gallimard, coll. « Blanche », 1960.
- 8 【原注】 *La Cérémonie des adieux. Entretiens avec Jean-Paul Sartre, août-septembre 1974*, Gallimard, coll. « Blanche », 1981.
- 9 「はじめに」においてポーヴォワールは以下のように書く。「その年月を私は自分が生きたとおりに語った。証人は証言の一部をなすから、私自身このことも少し語ったが、しかし最小限にとどめた。なぜなら、まず第一にそれが私の主題ではないからだし、さらにまた、あのことをどう受けとめているか私に問うた友人たちへの答えに記したように、それは『言えない、書きえない、考えられない、ただ生きているそれだけ』だからである」(『別れの儀式』、朝吹三吉、二宮フサ、海老坂武訳、人文書院、1983年、p.9)
- 10 【原注】 *La Vieillesse*, Gallimard, coll. « Blanche », 1970.
- 11 1980年に *Le Nouvel Observateur*誌に掲載された、『今、希望とは』« L'espoir maintenant » と題されたサルトルとベニ・レヴィ Benny Lévyの対談が問題になっている。ベニ・レヴィはサルトル晩年の秘書であり、ポーヴォワールは『別れの儀式』の中で、この大きなスキャンダルを引き起こした対談について書いている。
- 12 ドロレス・ヴァネッティ Dolores Vanetti (1912-2008) は1940年代にサルトルと恋愛関係にあった女優、詩人。『別れの儀式』の「サルトルとの対話」のなかではMとして現れている。2008年、ヴァネッティの死の一週間後、アニィ・コーエン-ソラルはル・モンド誌(7月20日)に、ヴァネッティのアメリカでの交友関係(デュシャン、ブルトン、カルダー、レヴィ-ストロースなど)やサルトルとの関係について書いている。
- 13 12世紀、神学者ピエール・アベラールとその弟子のエロイズとの恋愛は、往復書簡の形式の『アベラールとエロイズ』に描かれる。
- 14 ポーヴォワールのこと。
- 15 ポーヴォワールは、『別れの儀式』を以下のように締めくくる。「彼の死は私たちを引離す。私の死は私たちを再び結びつけはしないだろう。そういうものだ。私たち二人の生が、こんなにも長い間共鳴し合えたこと、それだけですでにすばらしいことなのだ」(『別れの儀式』、既出、p.157)。バダンテールがしたように、ポーヴォワールの生に思いを馳せ、この言葉を解釈する自由が我々にはある。